魅せる いばらき総文 2014 19

新聞部門

つくば秀英高新聞同好会

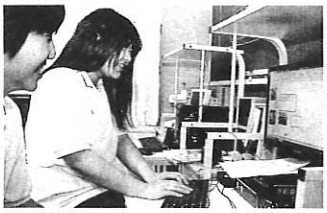
記者の喜びかみしめて

つくば秀英高（つくば市谷田部）の生徒会室で、新聞同好会の生徒2人がパソコンに向かい、レイアウトを考えていた＝写真。松葉みなぎさん（3年）は「取材先から裏話や内緒話を聞いた時が一番楽しい」と記者として工夫し、18年の「第18回全国高校新聞年間紙面審査賞」で奨励賞を受賞した。

同校の学校新聞「秀花新聞」は2009年、生徒会活動の一環として創刊され、月1回発行されている。内容は学校行事や全国大会に出場する生徒の紹介が中心。また、学校近くのお薦め飲食店なども掲載している。同好会メンバー11人全員で当した記事の見出しなどを決めた。

いばらき総文では、全国から集まった新聞部員とつくば市内の研究機関を取材し、新聞の共同制作も行う。参加する剛部美歩さん（3年）は「総文の生徒実行委員会は、市販や手作りの受信機を使用。主催者が街中などに隠した発信機の電波をキャッチし、発信源の位置特定数を競う。1人は同校アマチュア無線部員。イヤホンから聞こえる電波の音（電子音）を拾っているのだ。水長時間の競技時間は走り続けているという。このたび、同部の練習は500メートルの坂道を4本走ることから始まる。

この競技は総文以外にも、「全国高校ARDF競技大会」や高校生の世界大会があり、同部から日本代表選手を輩出したこともある。初の全国大会となる笠原悟さん（2年）は「そこ



◇新聞部門　27～31日、つくば市の筑波大学会館で開催。142校が参加した「第18回全国高校新聞年間紙面審査賞」の入賞作品など全国125校の新聞を展示する。

平成26年7月20日　毎日新聞

魅せる いばらき総文 2014 20

器楽・管弦楽部門

勝田高オーケストラ部

技術学び全国に備える

県立勝田高（ひたちなか市足崎）の音楽室で、オーケストラ部17人が「涙そうそう」を練習していた。弦楽器の講師がおらず、市民も多く、バイオリンやチェロの弦を押さえる「指板」部分には、ドレミの音階を示したシールが貼られている＝写真。

同校オーケストラ部は当初、吹奏楽部として発足。約30年前に弦楽器を投入し、オーケストラ部になった。しかし、部員数が減り、今は弦楽器のみになっている。弦楽器の講師がおらず、市民も多く、バイオリンやチェロの弦を押さえる「指ほど指導。部長の小池美季さん（3年）は「音程の合わせ方や弦の張り方の基本は先輩から教わった」。

いばらき総文では、2～3年生10人が「県合同合奏団」に参加。中学時代にテニス部だったという永井彩奈さん（3年）は「文化祭で全国大会出られるとは思わなかった。本番までに他校の生徒から技術を学んで備えたい」と心待ちにしている。【玉腰美那子】

◇器楽・管弦楽部門　28、29日、つくば市春日のノバホールで開催。全国48団体がオーケストラやビッグバンド形式で演奏する。県内からは「合同合奏団」「バラキ・スーパー・ビッグバンド」の2団体に計9校が参加。

平成26年7月23日　毎日新聞

魅せる いばらき総文 2014 21

将棋部門

江戸川学園取手高将棋部

「余裕のあるほうが勝つ」

駒を進める音とともに、ときおり喉が鳴る音が聞こえる。中高一貫校の江戸川学園取手高（取手市西）で、将棋部員が将棋盤に向き合っていた＝写真。一局を終えた中3の鈴田平さんは「もし自分があの手を逃したら、次の一手でやられていた」というぎりぎりの勝負が一番楽しい。

同校将棋部は54人が所属。週4日約2時間ずつに、ときおり集まって、1日2～3局を打っている。今春の県高校春季将棋大会で団体戦を制し、いばらき総文の出場権を獲得。さらに晩を考えるため、コンピューターの将棋ソフトを導入している。

藤巻智行さん（2年）は「コンピューターは腕を上げるにはいいけれど、人間にはある感情や焦りのミスがない」と人と向かい合う勝負の機微を再発見した様子だ。

団体戦は3人組。出場する留野龍平部長（2年）は「会場のプレッシャーに負けない気持ちが大切。余裕のある方が勝つ」。優勝を目指し、将棋盤に向かう。【玉腰美那子】

◇将棋部門　27～28日、水戸市新原2の県武道館で開催。全国218校が参加し、個人戦と団体戦をリーグ戦で競う。県内から県立鹿島高（女子団体）など8校14人が出場する。

平成26年7月24日　毎日新聞

魅せる いばらき総文 2014 22

アマチュア無線部門

土浦工業高アマチュア無線部

競技はまるで宝探し

県立土浦工業高（土浦市真鍋6）の校庭で、受信機を手に無言で体を左右に振っている＝写真。2人は同校アマチュア無線部員。イヤホンから聞こえる電波の音（電子音）を拾っているのだ。水長時間の競技時間は走り続けているという。このたび、同部の練習は500メートルの坂道を4本走ることから始まる。

この競技は総文以外にも、「全国高校ARDF競技大会」や高校生の世界大会があり、同部から日本代表選手を輩出したこともある。初の全国大会となる笠原悟さん（2年）は「そこまでは、市販や手作りの受信機を使用。主催者が街中などに隠した発信機の電波をキャッチし、発信源の位置特定数を競う。1～2時間の競技時間は走り続ける